鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 22 年 9 月 10 日）

雍也第六

7　季氏 閔子騫をして費の宰為らしめんとす。閔子騫曰く、善く我が為に辞せよ。如し我を 復 びすること有らば、 則 ち吾は 必 ず汝の 上 に在らんと。

閔子騫は孔子の弟子です。

季氏が閔子騫を自分の領地である費の国の責任者（代官）にしようとして、使者を送りました。

閔子騫はその使者に向って、「私はあなたの部下になるつもりはありませんので、どうぞご辞退申し上げます。よろしくお伝え下さい。もし再度私を呼ぶようなことがあるならば、私は必ず国境を越えて、隣の斉の国に出奔するでありましょう」と言いました。二度と私の所に使者として来て戴いては困りますという会話です。

現代に照らし合わせて見ると、閔子騫のような人はなかなかいないと思います。今の時代、「あなたを大臣にしようと思うが、出てきてくれないか」と言われれば、民間人でも政治家でも、すぐに尻尾を振って出て行くと思います。最近の事例で甚だしいのは、選挙で落選したにもかかわらず、もう少し法務大臣を続けるようにと言われたなら法務大臣を続け、尚且つ、死刑廃止を唱えていたのにもかかわらず、残り僅かな任期中に死刑を執行し、しかもその場所まで見せるような事をしました。何か世の中、不思議だなと感じました。

今の時代、「どうぞこのポストに就いて下さい」と言われると、皆就きますね。

私の知る限りでは、渋沢栄一さんは東京市の市長になって欲しいと言われて、断りました。更に、国務大臣になってくれるように言われた時も、断ったと述べています。それは自分自身の哲学にしたがって、自分の人生の信条から断ったのです。

私の師匠である木内信胤先生も、吉田茂さんから大臣になって欲しいと頼まれたけれどもお断りをした。奥様が病弱だという理由でしたが、「家内を苦しめてまで大臣をやろうとは思わないので断った。断って良かったと思う」とお聞きした記憶があります。

亡くなった人の話ばかりで、生きている人ではそういう話を聞いたことがないと思いました。

8　伯 牛　疾 有り。子 之を問う。窓より其の手を執りて曰く、之を 亡 わん。命なる

かな。斯の人にして斯の疾有るや。斯の人にして斯の疾有るやと。

伯牛は孔子の弟子で、仁徳があり孔子は非常に大事に思っていました。その弟子がらい病にかかって、孔子が見舞いに行ったわけです。らい病でだんだん身体中が爛れてくる。その顔を見るのが忍びないということで、孔子が家の中に入らないで、窓から手を差し伸べて伯牛の手をとって、「これを天命と言うのか。実に悲しい、情けないことだ。人徳のある素晴らしい伯牛が、こういう病に倒れるとは・・・。天命とは実に不合理だ」と、運命の不合理を嘆いたという文章です。

孔子と伯牛のこのような関係も、最近は聞いたことがないなと感じます。

最近は脳死状態にあれば本人の意思に関係なく、家族の意思で臓器提供が出来るようになりました。これについては世の中の為になるから良いことだという考え方もあります。それが良いか悪いかは分りませんが、孔子の時代から考えると、非常に技術的には進んだのだと思います。漫画のブラックジャックのような話が、現実に出て来ました。この前、新しい健康保険証を貰った時に、臓器提供をするかしないかを答えるようにという手紙を貰いました。まるで臓器提供をしないのは非国民であるかのような感じを受けたので、私は答えていません。難しい問題ですから。こんなものをアンケートのようにすぐに答えろというのは、役人は何を考えているのかと不愉快になりました。もう少し国民的な議論が深まってからすべき内容のものであって、軽々にやるものではないと感じました。

9　子曰く、賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂に堪えず。回や其の楽を改めず。賢なるかな回や。

これはかなり有名な台詞です。詠じている方も結構多いと思います。

一簞の食とは、ご飯を盛る竹の器に一杯です。一瓢の飲は、ふくべ（ひょうたん）を半分に割ったお椀で飲み物を飲むことです。

孔子が言うには、顔回は実に素晴らしい男だ。ほんの少々の食べものと、ほんの少々の飲み物を腹中に収めて、狭い路地の奥の小屋に住んでいる。普通の人は粗末な食べものや飲み物で、粗末な小屋に住んでいれば、我慢が出来ないはずだ。しかし顔回は道を学ぶという楽しみを変えようとはしない。実に素晴らしい人物だなあ。

最近、私は早朝に歩いているのですが、先日荒川の土手を歩いていたら、小雨の中、橋

の下にホームレスの人がかたまって雨を凌いでいました。周りを見ると、草むらにホームレスの人たちのテントがありました。ああいう人たちの中に、「賢なるかな回や」というような人がいるかなと思いました。ただ、元社長だったという人はかなりいるようです。

一簞の食・一瓢の飲、陋巷、これを楽しむような人たちは私の会社の中にもいないと思いますし、私もそういう部類には入りません。昔、土光さんという人は清貧のイメージで、毎日めざしを食べて質素な生活をしているという話が広がりました。青年会議所の集まりでご本人に本当の所をお聞きしたら、「私はあちこちで呼ばれてご馳走を食べなければならないので、その反動で家に帰った時くらいは、めざしや鰯で軽く食べたいのだ」とおっしゃっていました。やはりイメージとは違うのだと思います。

ですからこの文章も、今の世の中聞いたことがないと思います。無理に探そうとすれば、山奥に住んでいる老人夫婦がいれば、ちょっとはそのイメージにあうかなという氣がします。私は夏場は赤城山に住んでおります。熊が出ますので熊よけの鈴を鳴らしながら歩きます。そういう山奥でも、食堂があって、一簞の食・一瓢の飲ではない豪華な料理が出てきます。やはり日本は何処を探しても、こういう生活をしている所はないのではないかと思います。

他の国で探すとすれば、ブータンがギリギリ当てはまると感じます。ブータンはまだこういう生活をしている人達が大多数でした。家の中の一番よい部屋に大きな仏壇が置いてあって、仏壇にお金をかけていました。仏壇が粗末な家には娘を嫁がせないというような、仏教が生活に深く根づいている国でした。食べものは本当に粗末なものばかりでした。車が少なくて、信号はありません。一番雑踏の多い首都では、警官が手信号で車を捌いていました。江戸時代末期の日本人の生活によく似ていると感じました。

本日ご紹介した三つの章はいずれも、今の日本ではこういう人はいないなと感じます。本日は以上です。